

# 神奈川県城山町向原東遺跡出土の表裏縄文土器

山 田 仁 和

- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1. はじめに          | 5. 初源期の表裏縄文土器に関する土器 |
| 2. 向原東遺跡出土の土器    | 6. 石畳系列の検証          |
| 3. 神奈川県内の比較資料の検討 | 7. おわりに             |
| 4. 表裏縄文土器の編年     |                     |

## 1. はじめに

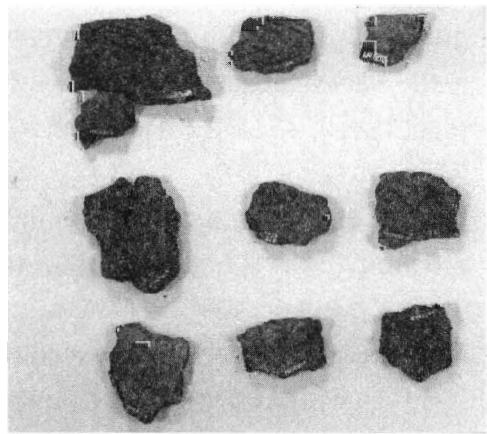
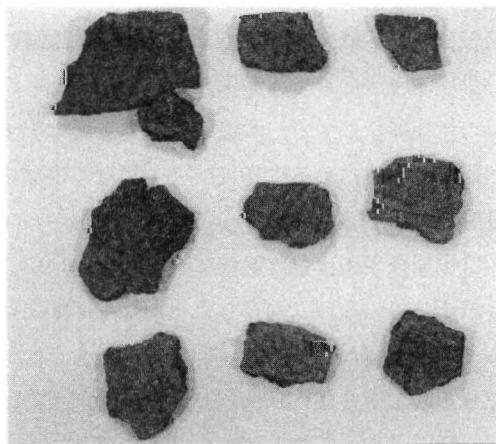
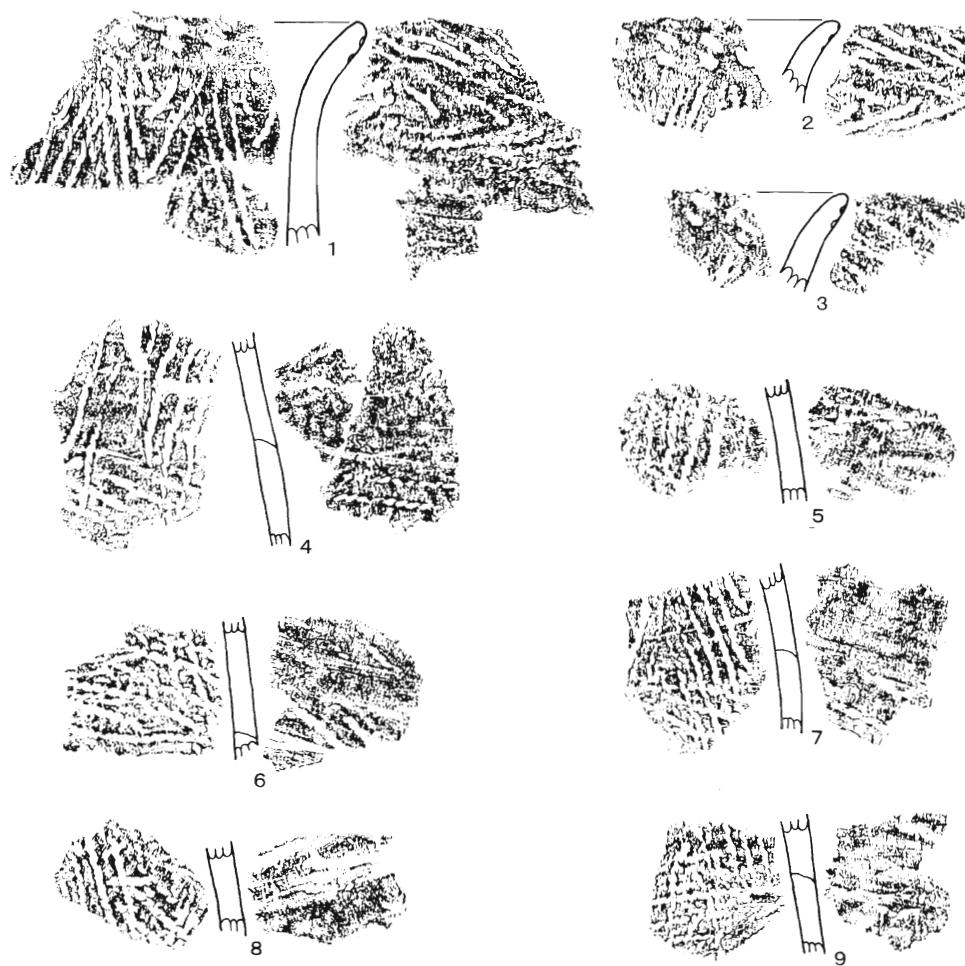
神奈川県における縄文時代草創期土器の研究は、土肥孝氏の先駆的な取り組み（土肥1986）があり、また大和市域の上野遺跡第1地点、第2地点、相模野第149遺跡、上草柳第3地点東遺跡、深見諏訪山遺跡、綾瀬市寺尾遺跡、藤沢市代官山遺跡、横浜市花見山遺跡等では比較的まとまった資料が出土し資料が蓄積されてきた。しかしながら、これらの遺跡の多くでは隆線文系土器が主体的に出土し、草創期後半に関しては良好な資料に恵まれていない。

本稿では、神奈川県津久井郡城山町向原東遺跡から出土した器面表裏に施された草創期後半に位置づけられると考えられる土器の分析をつうじて、当該期の土器群の編年と系統について検討する。

## 2. 向原東遺跡出土の土器

第1図に示した資料は1999年に実施された川尻向原土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財調査で向原東遺跡において出土した（註1）。遺跡の位置、立地および図示した遺物の出土状況の詳細については近日中に刊行予定の報告書に譲ることとし概要を述べることとする。遺跡は神奈川県津久井郡城山町向原に所在し相模川と谷津川の合流地点の河岸段丘上に立地する。遺物出土地点は、段丘縁辺から約600m東に位置し平坦な地形を呈する。本遺跡の基本土層は表土を含めて5層に分けられ、このうち本遺跡出土土器の大半を占める中期後半の土器は第Ⅲ層を中心として出土する。ここで検討する土器は第Ⅲ層から5点、第Ⅳ層から7点、第Ⅴ層から1点検出され、すべて同一個体片である。層位的には中期後半の土器と明瞭に分離できないが、出土地点の周辺では早期後半（条痕文系）以外は出土していない。図示した土器は平面的には直径約2mの範囲に集中し、約60cmの上下差をもって出土した。

第1図1～9は接合しないものの同一個体片である。1～3は口縁部片、4は口縁部下の弱い括れ部から胴部中央部のやや膨らむ部位、5～9胴部上半から中央部にかけての部分にあた



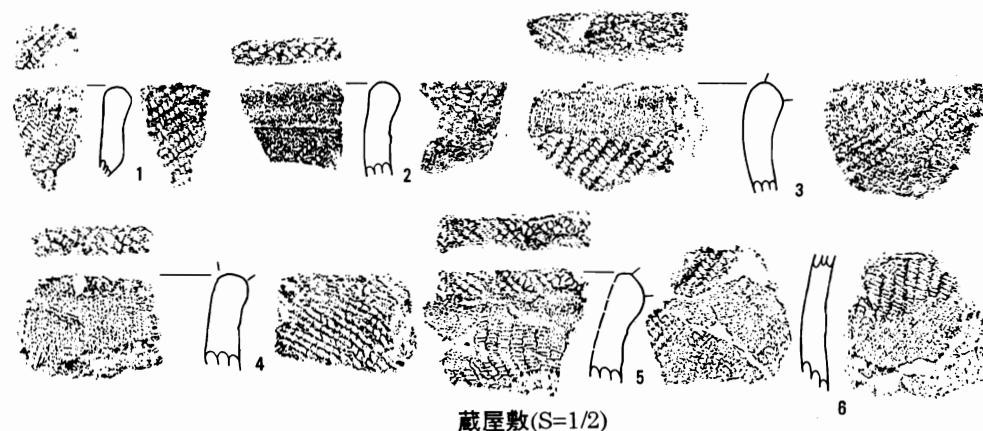
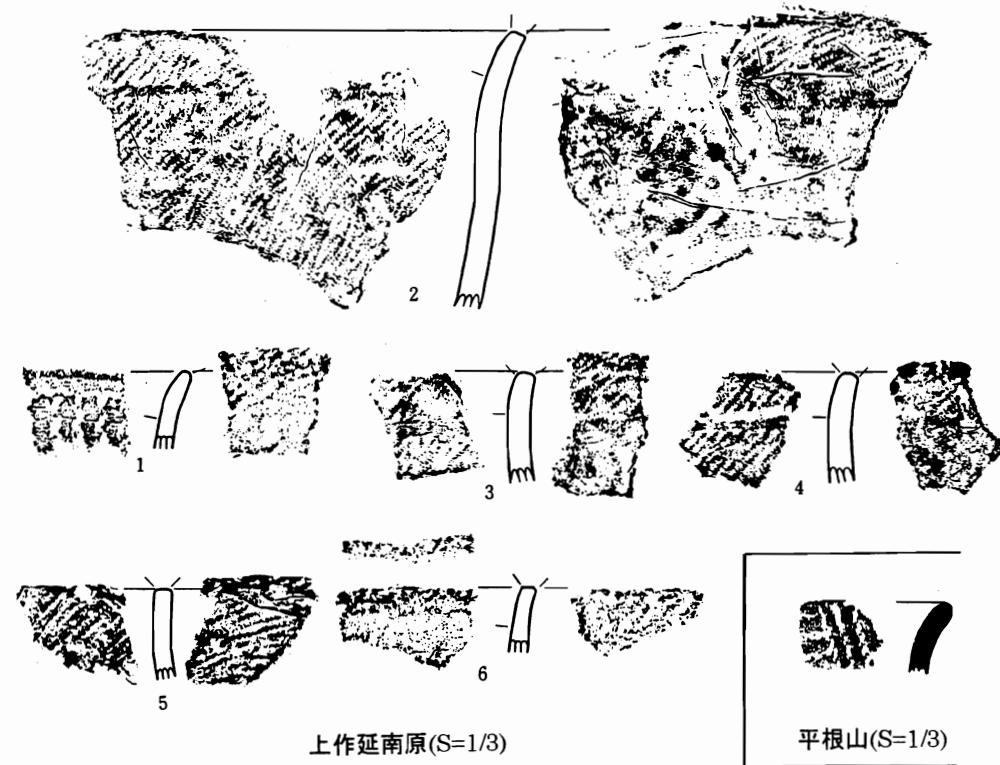
第1図 向原東遺跡出土土器 (S=1/2)

る。色調は外面が暗めの赤褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。胴部内面には指腹による浅い凹凸がみられる。口唇部はやや尖頭状～丸頭状を呈し肥厚はしない。口縁部は長さ2.5～3cm、緩く外反し頸部がわずかに括れ、胴部はやや膨らんで底部に移行すると考えられる。文様は口唇部直下の外面にR摺の摺糸を用いた短い摺糸側面圧痕が右下がりに2～3条、縦位に間隔を開けて施される。この摺糸側面圧痕の周囲は施文時の押圧により窪んでおり、口縁部を上面方向から観察すると細かい波状を呈している。摺糸側面圧痕は1条に3～4の節が認められる。口縁部から胴部最大径付近までには縦方向に木目状摺糸文が施文されている（註2）。胴部には斜位から横位方向に施文されている。器面の条の切り合いからは、胴部の施文後、口縁部に縦位の施文が行われたことが観察される。口縁部内面には外面と同一原体によると推定される木目状摺糸文を横位に施文する。1、4にみられるように、内面施文は口縁外反部は密であるがその下には無文部をおき、胴部には疎らに施文される。

この土器は表裏縄文土器で、いわゆる多縄文系（註3）に属するものと一応考えられるが南関東においては当該期の資料は未だ少なく類例を指摘することは困難である。そこで、本資料のいくつかの特徴に注目し、他遺跡の資料と比較することによって編年的、系統的位置付けを明らかにしていく。向原を比較検討する上での具体的な特徴は、1) 口縁部の押圧施文、2) 口縁部の幅の広い文様帶、3) 器面表裏面に施文、4) 口縁が外反し胴部がやや膨らむ器形、等である。表裏縄文土器のうち地文以外に文様を施文される資料は少ない。はじめに口縁部文様帶をもつ例について検討していく。

### 3. 神奈川県内の比較資料の検討

神奈川県内における表裏縄文土器のうち口縁部文様帶をもつものおよび関連する資料を第2図にあげた。上段1～3は上草柳第3地点東遺跡（中村1984）出土で、1、2には地文に横走する摺糸文が施文され、1は口縁部の幅の狭い無文部下に縦条体圧痕が施され、この下部にやや間隔をあけて摺糸側面圧痕が見られる。2は横走する摺糸文が観察されるが、土肥孝は上部の条が回転手法ではなく摺糸側面圧痕であるとしている（土肥1986）。1、2はともに口縁の上面観が波状を呈する。3は地文にRL縄文が施され、この上に地文より太いRL原体を横位に2段押圧している。内面には口縁部に無文部を有し、以下にRL縄文が施文される。表面の短い摺糸側面圧痕の横圧される幅と裏面の無文部の幅がおおよそ一致することを土肥が指摘している。このほか、同遺跡ではLR縄文の地文上に2条の摺糸側面圧痕を施文した土器が2点出土している。これらの資料は地文縄文上に横位の摺糸側面圧痕で幅の狭い文様施文部を区画する共通性が認められる。1については口縁無文部がこの文様施文部の上に重畠するという特徴を有する。



第2図 上草柳第3地点東・上作延南原・平根山・藏屋敷遺跡出土土器

報告書では文様の系統からは回転縄文土器に比定できるだろうとしながら、横位撚糸が施文されることから縄文草創期の回転縄文土器群と撚糸文土器群を繋ぐものとの評価を与えていている（中村1984）。また、先に言及した土肥孝の考察（土肥1986）では、押圧手法が用いられるという共通性、1、3の無文部の両側に地文を有する点からこれらに「型式学的近似性を感じざるを得ない」とした上で、柾の湖II式と同一時期ないしやや古い時期に位置づけている。土肥の編年観は押圧→半置・半転→回転という変遷を重視しており、表裏縄文の存在と押圧手法の採用から前記のような編年的位置付けとなった考えられる。しかしながら、表裏縄文である3の内面の幅狭の無文部は後段で論じる表裏縄文の内面施文の縄文に対比出来るものとすれば、表裏縄文でも古くは位置づけられること、および撚糸側面圧痕は井草式でも用いられることから、これらの土器群は柾の湖II式に先行することはないものと考察される。

第2図中段1～6は上作延南原遺跡（持田1986）の資料で、2～4は同一個体とされている。1は表面の口縁部にL撚の撚糸を用いた短い撚糸側面圧痕を2段、傾きを違えて羽状に施文する。内面には単節縄文が、表面の2段の撚糸側面圧痕の施文部とほぼ同じ幅で施される。2～4の口縁部には幅の狭い無文部が見られ、施文はこの無文部を境として「上方に向けてと、下方に向けてとに、振りわけてされており、上下方向に振り分け施文で少し盛りあがった感のある5mm幅の無文境界帯が横走し、口頸部文様帯を作り出している」とされている（持田1986）。内面には無文部上部の縄文施文部と同じ幅で縄文が施される。5は表裏両面とも縄文が施文されており、内面は遺存部以下にも及ぶものと推定されている。6は口縁部表面に無文部を有し、この下部にLR縄文を施す。内面の縄文施文部の幅が外面の無文部の幅とほぼ一致する点は注目される。

上草柳第3地点東遺跡と上作延南原遺跡の資料は撚糸側面圧痕の施文あるいは無文部により口縁部に幅の狭い文様帯を区画、作出し、内面にはこの表面の文様施文部とほぼ同一の幅で縄文施文部ないし無文部が見られることを特徴とする土器群であるといえる。後者の特徴を有するものが、蔵屋敷遺跡（小林1992）出土の表裏縄文土器群（第2図下段1～6）中に確認される。2～4は口唇部直下に横位の器面調整による無文部があり、内面にはこれと同一幅で縄文が施文されている。また、6は口縁部が欠損し口唇直下が不明だが内面の縄文施文が括れ部までおよぶことからすれば、2～4に見られる表面の無文部は存在しないと推定される。

向原東遺跡資料の内面施文は外反する口縁部を中心に行われ、この下に指頭押圧の目立つ無文部をもち胴部中央部は疎らである。内面の無文部下端は器面表面では、撚糸側面圧痕の施文方向が縦位から横位にかわる部分にあたり、器表裏面の文様施文の幅を対応させようという意図がうかがえる。このような特徴については、上草柳第3地点の土器に関して前に触れたように土肥が指摘しており、上作延南原遺跡の資料はその好例である。蔵屋敷遺跡においては器表面に作出された無文部の幅に対応して内面に縄文が施される。上作延南原遺跡や蔵屋敷遺跡の表裏縄文は、内面の縄文施文が口縁部付近に限られるという特徴を有することから後述する戸

田哲也の提唱する「三枚原型」の段階に位置づけられる。器面表面の口縁部文様帶幅の狭小化と、内面施文の口縁部への集中化傾向は並行して進んでいると考えられる。

#### 4. 表裏縄文土器の編年

表裏縄文土器については近年、いくつかの論考が発表され、とくに編年的位置付けについては異なった見解が提示され共通の理解に至っていない。

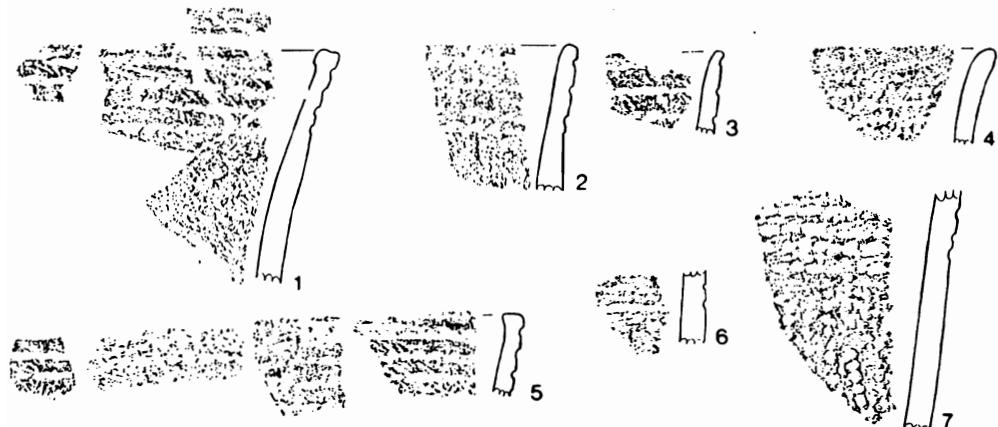
戸田哲也は表裏縄文土器を井草式以前に位置づけるが（戸田1988）、宮崎朝雄・金子直行は井草式直前段階に大谷寺洞穴を位置づけ、学史上著名な柵の湖や石畳、小佐原、柄原等を井草I式、三枚原、増野川子石の一部等を井草II式に並行させた（宮崎・金子1989）。戸田の編年観は、小佐原→三枚原を基軸として室谷下層式の並行関係に置き、これに「石畳2類」、柄原岩陰出土の縄側面圧痕文を後続させ、室谷上層式に並行するとした。戸田は1994年の論文（戸田1994）では、石畳1類、2類を石畳下層、石畳上層と「呼び変えることを改めて提案したい」としており、この改変には「土器認定の訂正を含め」ていることが触れられている。1988年と94年の戸田の見解の異同について検討すると、石畳1類は94年の論文では石畳上層に含められたものが多く、石畳下層の資料は88年の論文では石畳1類としてあげられてた2点があるので、94年の論文ではじめて取り上げられたものが大半である。さらに、石畳上層は三枚原に「大略並行するという編年的位置を改めて主張しておきたい」と述べているが、88年の段階では表面のみ回転縄文、縄側面圧痕文を特徴とする石畳2類は「室谷上層式に類似するといわれる」と解説しており、井草式並行の段階の可能性が高いことを示唆していた。表裏縄文土器の終末を井草式以前とする戸田の立場からすれば、この訂正は詳細に取り上げられるべきであろう。戸田の88年の見解を重視すれば、石畳上層は室谷下層および上層に並行することになり、井草式の直前から井草式並行の位置を占める土器が含まれることになる。

表裏縄文土器の編年に関して筆者は、器面内面に凹凸が目立ち縄文が胴部下半まで施文される「小佐原型」から、内面整形が丁寧に行われ内面の縄文施文が口縁部に集中する「三枚原型」への変遷は、戸田が主張に従い基軸にすべきであると考える。各型の標識とした両遺跡は至近距離にあり、この新旧関係は石畳岩陰において層位的にも保証されているとすべきである。これを小佐原・三枚原系列とする。このように考えた場合、問題なのは戸田が旧稿（戸田1988）で「石畳2類」とした土器群のうち撚糸側面圧痕をもち内面に縄文施文のない資料（第3図1、2、4、5）である。戸田はこれら柄原岩陰の撚糸側面圧痕の資料について「石畳岩陰において確認された層位関係に基づけば、この類は表裏縄文より上層位に存在するようであり、室谷上層式との関連のもとにより新しい時期の所産と考えられる可能性がある」とされた。石畳岩陰の層位の認定については議論があり（宮崎・金子1989、中島1991、山形1991）、戸田も若干の修正をしているが、ここで問題としている土器群（第3図下段）が最下層（14層）の上位か

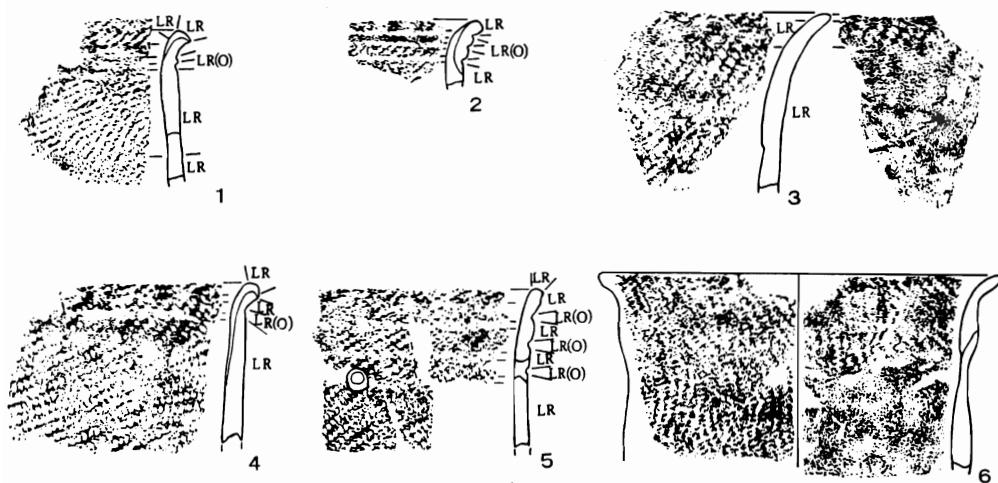
神奈川県城山町向原東遺跡出土の表裏縄文土器（山田）



大谷寺洞穴(S=1/3)



雨古瀬(S=1/3)



石畳(S=1/3)

第3図 大谷寺洞穴・雨古瀬・石畳岩陰遺跡出土土器

ら出土していることは認めてよいと思われる。この石畠岩陰で第1群第6類とされた、縄文が「表面のみの施文で、口縁直下に1～3条の押圧縄文が加えられる」および第7類「第6類同様押圧縄文が加えられるが、器壁が薄く、胎土に金雲母を大量に含んでいる。また、口縁は外反せず直立する」(巾1988)とされた土器の編年的な位置と系統はどのように考えるべきであろうか。

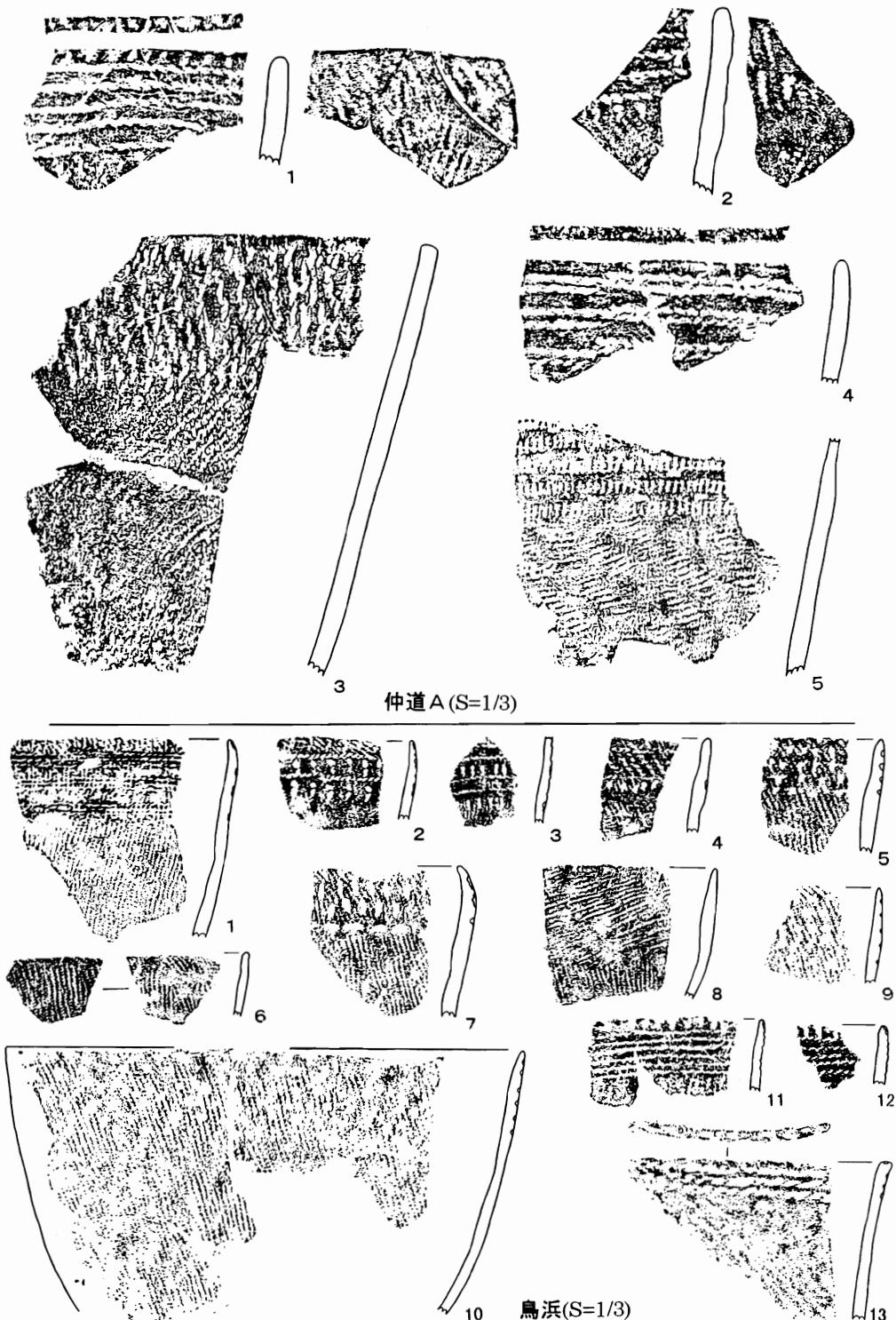
第3図上段は大谷寺洞穴出土である。(宮崎・金子1989)に初めて実則図が公表された。口縁部は角頭状を呈し、やや内湾する。文様は地文に縄文を施文し、口縁部に4条、実測図では胴部に1条の押圧縄文が認められる。宮崎・金子の論文では胴部の押圧縄文は3条とされている。『栃木県史 資料編1』(塙1976)の153P第10図上段の2列目中央には、3条の押圧縄文の施文された胴部破片が掲載されており、このような資料の存在から胴部の押圧縄文は3条とされたものかとも考えられる(あるいは、この2点が同一個体と推定されているのか)。宮崎・金子は、この大谷寺の資料を井草I式の直前段階(大谷寺III式段階)におき石畠岩陰遺跡の土器群(本稿第3図下段)への文様からは型式学的な連続性が認められることを強調するとともに、器形のうえで前者が口縁が隅丸方形で平底を呈し、後者が口縁が円形で緩く外反し、胴部がやや丸みをもって丸底の底部につながるという大きな変化が存在するとし、これが井草式成立の影響によるものとして、石畠岩陰を井草式の初頭に位置付ける編年を発表している(宮崎・金子1989)。大谷寺洞穴の押圧縄文の施文される資料(第3図上段)から石畠岩陰の資料(第3図下段4)への変化は「線状押圧縄文の口縁部文様帶は幅をやや狭くして」と説明されている。前述したように表裏縄文土器にあって口縁部に文様の施文される土器群に関しては、時期が新しくなるにしたがって施文部の幅が狭くなる傾向にあることは認められるが、大谷寺洞穴資料は押圧縄文が胴部の中位、最大径付近にまで施文され、口縁部からこの部分までを「文様帶」とすれば石畠岩陰への変化は「やや狭く」した程度ではない。ちなみに(宮崎・金子1995)では、「大谷寺III式段階の押圧縄文は、通常口縁部に4条前後施文されて一定の幅を持ち、口縁部文様帶を構成することが特徴になる」と説明されている。横位に並行して押圧縄文を施文する土器群(上草柳第3地点東、中道A、雨古瀬、石畠岩陰、鳥浜等)において押圧縄文が胴部中位にまで及ぶ例は大谷寺洞穴以外では今までのところ確認されておらず、例外的な資料とすることが出来るかもしれない。しかしながら、大谷寺洞穴の内面施文は胴部中位ないし底部付近までおよんでもり、内面器面は凹凸(指頭押圧痕)が目立つ。三枚原→小佐原で認められる内面施文の範囲の縮小化の傾向と、あわせて表面の文様帶幅の狭小化が連動しているとすれば、大谷寺洞穴資料はより古相を呈すると考えられる。

口縁部と並行に長い押圧縄文が施文される資料としては、雨古瀬遺跡例(鈴木1976)(第3図中段)があげられる。口縁部は直線的に外反し角頭状を呈する。撚糸文を地文として押圧縄文が4条程度施され、この点では大谷寺洞穴に類似する。しかし押圧縄文は胴部まではおよばず、内面には施文されない。ただし図示しないが表裏縄文施文の土器も出土している。また、

石畠岩陰（第3図下段）では地文L R縄文上に押圧縄文が施されるが、その条数には1～3条と違いがみられる。2の口縁部は丸頭状でゆるく外反し3条の押圧縄文が施され、1、4は短く外反する口縁の屈曲部に、1は2条、4は1条の押圧縄文がみられる。石畠例では押圧縄文の条数の減少にともない条線間の間隔も狭まり口縁部文様帶の施文幅の狭小化が進んでいる。これを石畠系列とする。また、これらとともに、内面の口縁部付近に縄文が施文される土器が出土しており、この下層（14層）からは内面の底部付近まで縄文施文のみられる土器が出土していることを考え合わせれば、石畠系列の文様帶狭小化の傾向は、小佐原・三枚原系列の内面施文範囲の縮小と同調したもので、両者の並行関係を示していると考えられる。

## 5. 初源期の表裏縄文に関する土器

口縁部付近に横位方向に並行する押圧縄文の初源は、現在のところ、仲道A（渋谷1988）、鳥浜（網谷1979）に求めるのが最も妥当だろう。仲道A（第4図上段）1は、口唇部に縄文を施文し口縁直下には縦位の短い押圧縄文、以下に押圧縄文を5条施している。さらに、この下に縄文を施文する。内面にも縄文が施文される。2は口縁部に押圧縄文を4条施し、口縁部の文様の下部に短い押圧縄文がみられ、以下に縄文が施文される。内面は自条自巻の圧痕が口縁部に施文され、この下に無文部を挟んで以下、縄文が施文される。外面の口縁部文様帶下部を短い押圧縄文で区画する手法は、鳥浜（第4図下段）2～4、7に通じるものである。仲道Aの4は口唇上には縄文、口縁部には撚りの方向を違えた2本単位の押圧縄文を3条以上施す。3、5には横位の押圧縄文は施文されないが、3は縦位に撚紐を押圧し、5は縦位の自条自巻を並べて5段以上施文して、口縁部に幅の広い文様帶を形成する。鳥浜（第4図下段）では地文上に撚糸の先端圧痕と撚糸側面圧痕を施文するもの（1～3、11、12報告書では第1群A類）、撚糸先端圧痕文を施文するもの（4、5、7同第1群B類）、刺突文を施すもの（9、10、13同C類）がある。また、6は表裏縄文で鳥浜では唯一の例、8は縄文のみが施文されるが口縁部には斜行する無節縄文、胴部には縦走するL R縄文が施文される。この2点は報告書ではE類に分類されている。鳥浜貝塚の報告では「いわゆる草創期の多縄文土器系に属する土器」とされた第1群（鳥浜I式）は、口縁部文様をもつA～D類と持たないE類の間に先後関係を想定されている（網谷1979）。この土器群について土肥孝は「基本的には、口縁部文様帶の縮小化の傾向をよく示している」として、A・B・C類（口縁部文様帶の盛行）→D類（文様の口縁部端への集中）→E類（口縁端部上の縄文施文、表裏縄文の出現）という変遷関係を示した（土肥1982）。D類の特徴とされた口端部の撚糸先端圧痕はA～C類にも施され、D類は口縁部の文様が省略されたものとも考えられ、E類は本稿第4図下段8にあげたように口縁部と胴部の縄文施文方向を異にして口縁部の文様帶を表現した例もあり、同様な資料はD類にもみられる。鳥浜I式は全体として、少量の表裏縄文の存在が示すように室谷下層式直後の表

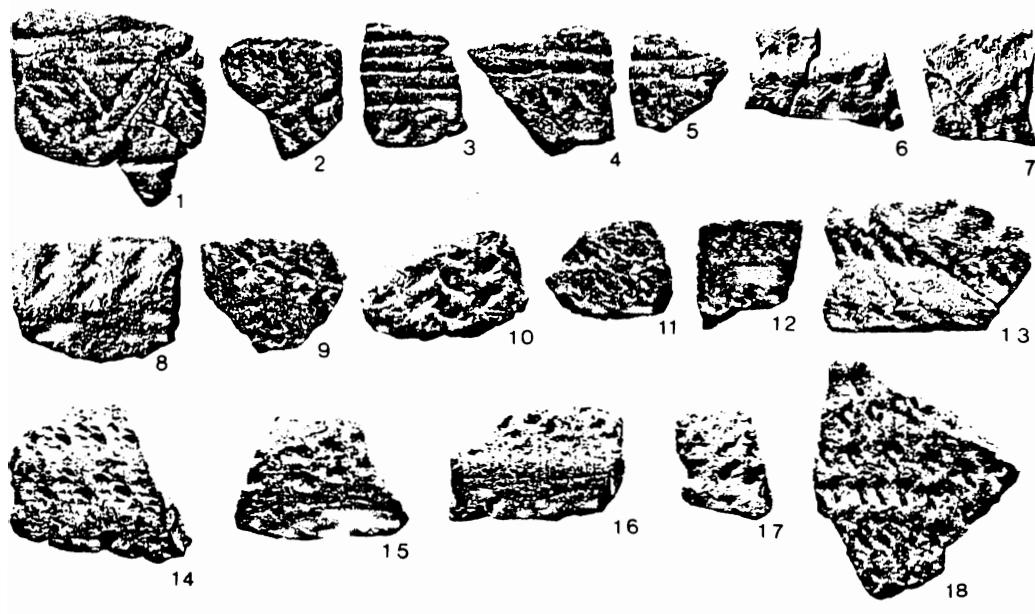


第4図 仲道A・島浜貝塚出土土器

裏縄文出現期の様相を、仲道Aとともに表していると考えられる。しかしながら土肥が想定した口縁部の文様帶を明瞭に表現する室谷下層式以降、井草式の段階までの変遷を「口縁部文様帶の縮小化の過程」と捉える分析視点については首肯できる。

このような撚糸の押圧手法による施文が多用され、あわせて回転縄文がみられる資料は、関東地方では、水久保遺跡（小林ほか1979）、西谷遺跡（栗原ほか1961）、宮林遺跡（宮井1985）、橋立岩陰（芹沢ほか1967）、五目牛新田遺跡（萩谷2000）があげられる。また、細片のため判然としないが、第2図平根山（赤星ほか1958）の資料もこれに含められるかも知れない。水久保の資料（第5図上段）には撚糸側面圧痕を鋸歯状（1）、並行、羽状の押圧縄文（3～5、2、10、12）、撚糸先端圧痕（15～18）を施文したもの等があり、回転縄文の施文された資料も出土している。西谷例は多くの点で水久保に類似しており、並行、羽状の押圧縄文（3、1、4）、回転縄文（5、6、8）施文がみられる。6、7には内面まで押圧縄文が施文され、表裏縄文の初源期の例とすべきことでは衆目の一致する所である。また西谷では爪形文土器も出土している。

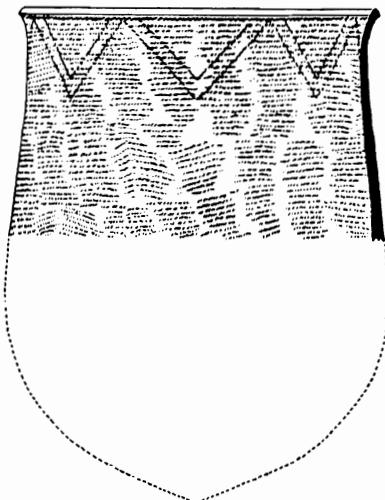
宮林遺跡第4号住居跡からは、爪形文の施されたもの、撚糸の側面圧痕、先端圧痕が施されたもの、回転縄文施文のもの等が出土している（第6図上段）。宮林の資料は1986年に開催された埼玉県考古学会主催の「縄文草創期—爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題」（埼玉考古学会 1986・88）のきっかけともなったもので、これら土器群の「共伴」については評価が分かれるところである。第6図上段には、このうち撚糸側面圧痕が縦位方向の羽状に施文される資料をあげた。水久保の出土の第5図1に類似するとともに、向原東のモチーフに繋がるのではないかと考えられる。宮林の遺構外からは表裏施文の土器が出土している（第6図上段1～6）。4号住居跡からは表裏縄文は検出されておらず、住居跡出土土器群と遺構外の土器群との同時性についての評価にも重要な問題を投げかける資料である。5は表面に撚糸文、裏面に撚条痕を斜位に施す。他は表裏に縄文が施文される資料で、1、3は口縁部に幅の狭い無文部をもち、これに対応するように裏面には口縁部に限って縄文が施文される。2、4、6は裏面の胴部付近まで縄文が施されるようである。1、3は、上草柳例と対比することができ、2、4、6よりは新しい時期に位置づけられる。7～13は、撚糸側面圧痕が施文されるもので、11、12は撚りの方向を変えた2本単位の撚糸側面圧痕で鋸歯状のモチーフを描出し、自縄自巻を並べて施文する。鋸歯状のモチーフは4号住居跡の撚糸側面圧痕を施されたものとの繋がりをうかがわせる。13は表裏面に撚糸側面圧痕の施された資料で、表裏縄文土器と撚糸側面圧痕を施される土器が、あるいは一部同時に存在していた可能性を認める根拠となる。橋立岩陰（第6図下段）の資料から撚糸側面圧痕、絡縄体圧痕（1～10）、回転縄文（11、12）、表裏縄文（14、15）をあげた。羽状（2、4）、並行（10）の撚糸側面圧痕といった文様や直線的に外反する口縁など水久保、西谷に類似する。5、13は斜縄文の地文上に撚糸側面圧痕が斜位、横位に施文される。回転施文縄文と撚糸側面圧痕の併存をあらわしている。14、15の表裏縄文は宮林の表裏に撚糸側面圧痕の施された資料を重視すれば、他の土器と共伴するものと考えることができよう。



水久保



西谷(S=1/2)

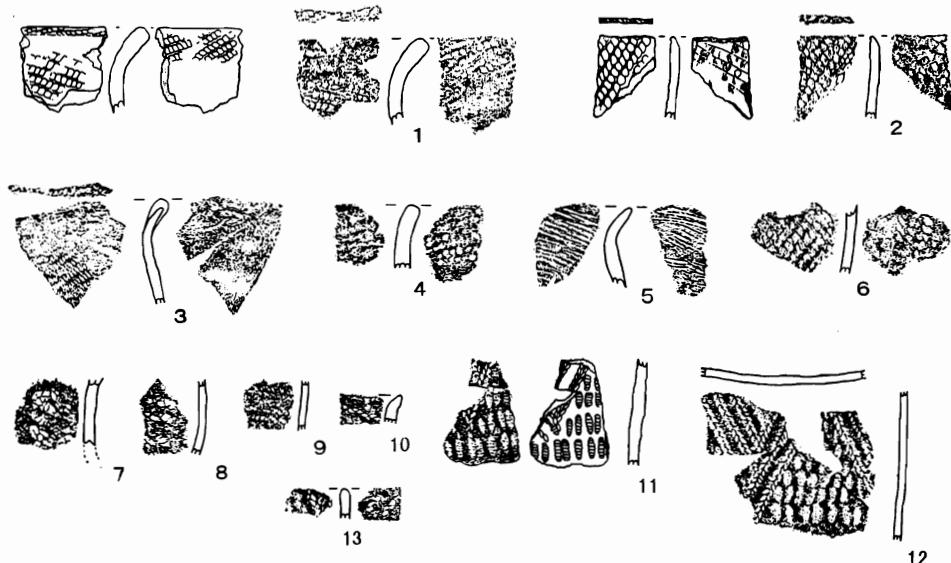


室谷上層

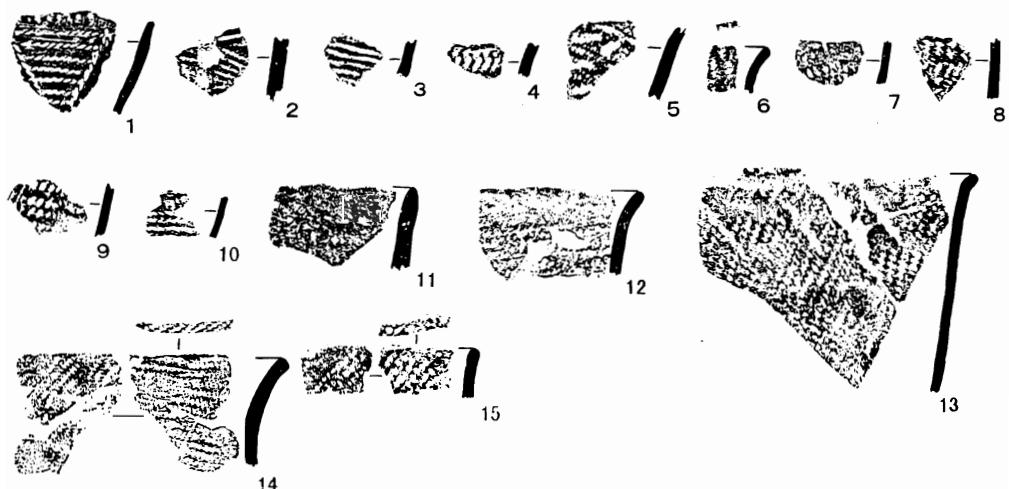
第5図 水久保・西谷・室谷洞窟遺跡出土土器



宮林 4号住居跡(S=1/3)



宮林 ケリット(S=1/3)



橋立(S=1/3)

第6図 宮林・橋立岩陰遺跡出土土器

## 6. 石畳系列の検証

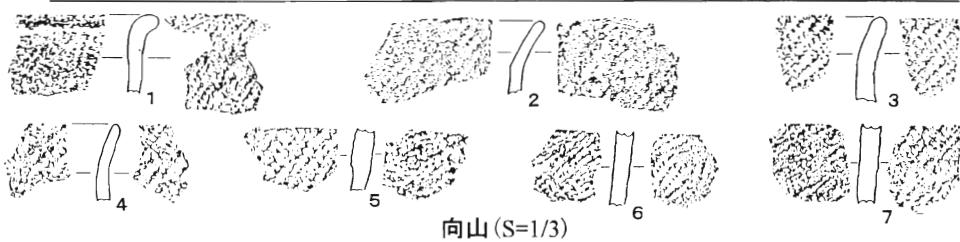
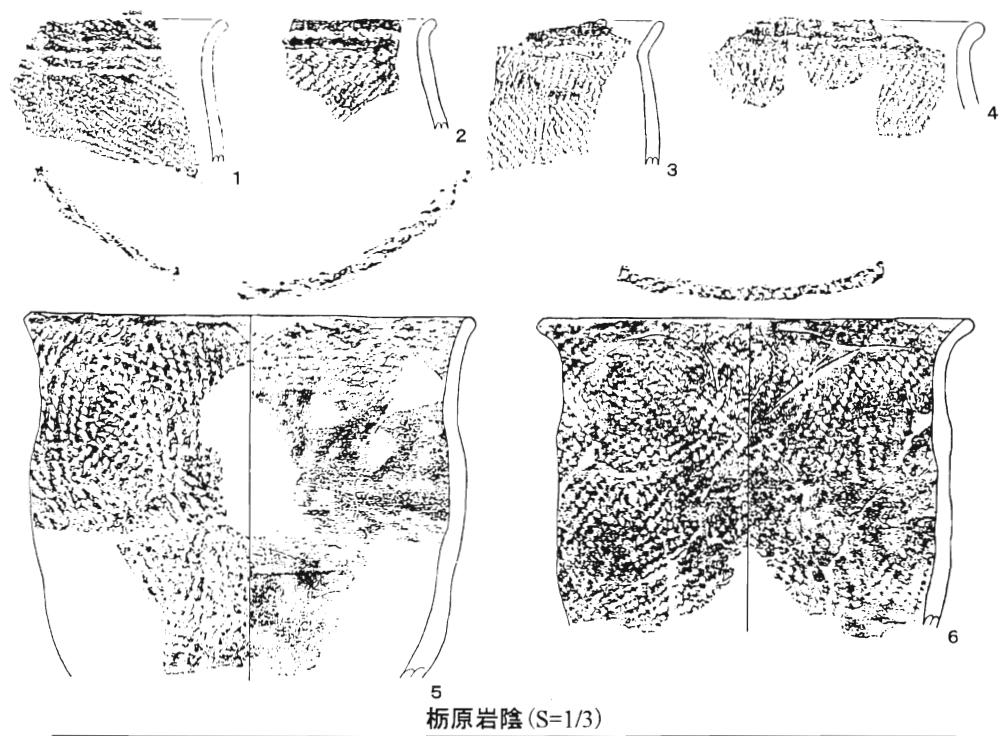
表裏縄文土器の初源期を鳥浜、仲道Aの段階におき井草式の成立までの過程を推定する場合、器面内面の縄文施文の消失、口縁部文様帶の狭小化という変化の方向性が推定される。口縁部文様帶の狭小化の変遷を一遺跡で最も連續的に復元できるのが石畳岩陰であると考える。先に、石畳岩陰にみられる縄文地文上に横位の撚糸側面圧痕が押圧される土器群の変遷から石畳系列を設定し、圧痕の条数の減少に伴う口縁部文様帶幅の縮小を想定した。さらにこの傾向が、表裏縄文土器の内面に施文される縄文の口縁部への集中と並行していると推定したが、この仮説は実際の変遷と一致すると考えることは妥当だろうか。いくつかの資料によりこれを検証する。

第7図上段は柄原岩陰（西村1982）の資料である。1～4は地文に縄文が施文され、外反する口縁部の直下に1条ないし2条の撚糸側面圧痕が施される。内面には縄文は施文されない。1の並行する撚糸側面圧痕は室谷上層に類例を求められる。2～4の口縁部下の撚糸側面圧痕は、第5図下段、室谷上層の器形の復元された土器（第5図下段）の口縁に並行に巡る撚糸側面圧痕に対比でき、鋸歯状の文様を描出する2本単位の撚糸側面圧痕は、第7図上段1のそれと類似する。1～4は室谷上層式段階（井草I式）におくことができよう。

戸田が三枚原の段階に設定した「山居型」（戸田1988）は石畳系列の新しい段階（第3図1、2）、向原東は幅の広い口縁部文様帶、胴部までおよぶ内面施文や口縁端に施文された撚糸側面圧痕が水久保、西谷のものに対比できることから古い段階（第3図5）に位置づけられる。また上草柳、上作延南、蔵屋敷は新段階、雨古瀬は古段階、大谷寺洞穴はこれと同じかやや古い段階に位置づけられる。これは、石畳系列の変遷と矛盾しない。

一方、増野川子石遺跡（酒井1988第7図中段）、向山遺跡（友野1988第7図下段）でも、地文に縄文を施し口縁直下に撚糸側面圧痕を1条（第7図中段1、3、下段1）ないし2条（第7図中段4）施文する土器が出土している。これらの資料は、器面内面の胴部までも縄文が施される。増野川子石、向山例は柄原の資料とは口縁の形状や想定される器形が異なるが、増野川子石（中段4）は口縁部が丸頭状で外反し柄原（上段1）に類似する。また、向原（下段2）の内面に稜をもち短く外反する口縁は柄原（上段3）に近似するといえる。これらの資料からは、わずかな例ではあるが口縁部の形状や胴部上半部の器形は時期決定に有効ではないと考えられる。増野川子石遺跡（第7図中段）、向山遺跡の口縁直下に撚糸側面圧痕をもち、内面の胴部まで縄文が施文される例は、小佐原・三枚原系列と石畳系列の並行関係と一致しない。柄原の表裏縄文土器（第7図上段5、6）の存在を根拠に第7図に示した3遺跡をほぼ同時期に位置づけるべきであろうか。初源期の表裏縄文にみられる幅広の口縁部文様帶が撚糸文（井草I式）には引き継がれること、そして内面施文も同様であることからすれば、増野川子石、向原の編年的位置を柄原（1～4）の段階までは下らせることはできない。そのように考えると増野川子石、向原と柄原の撚糸側面圧痕に、直接的な系統関係を推定することは困難なので

神奈川県城山町向原東遺跡出土の表裏縄文土器（山田）



第7図 栃原岩陰・増野川子石・向山遺跡出土土器

はないだろうか。口縁部下の屈曲部に施される1～2条の撚糸側面圧痕は石畳系列の口縁部文様帶の狭小化の過程から生じたものと、これらより古い時期に独自に考案されたものがあると考えられる。

“比較”を基礎とした型式学において、あらかじめ類似した形態をもつ資料は系統関係にあることを仮定(ないし公理)することによって、これらを比較しその類似の程度もしくは共通する特徴の多寡により類縁関係の復元が可能であるとする方法を用いることに妥当性が認められることになる。このように考えれば、ここで検討した事例の示すところは、類似した形態が系統関係をかならずしも保証しないということであり、この方法論の適用自体が疑問視される。では、石畳系列の変遷および小佐原・三枚原系列との並行関係の仮説は成り立たないとすべきだろうか。前述したように初源期の表裏縄文土器に関連すると考えられる資料にみられる口縁部文様帶の盛行とその後の表裏縄文土器の口縁部文様帶の縮小化、および内面施文の消滅という変化の方向を認めるかぎり、先の仮説は否定し得ないと考えられる。

## 7. おわりに

異なる系譜から類似した形態が発生しうるとすると、形態比較による系譜関係の復元と歴史的立場（山田2000）の基盤を危うくする。かつて、生物学者の丘英通は1931年「生物学概論」（丘1931）において「歴史的の類縁関係は似よりの程度による類縁関係とは全く別個のものであり、似よりの程度を基とした系統樹は事実上の歴史とはならない」とし、「歴史的の類縁関係」と「似よりの程度を基とした系統樹」を混同することを戒めている。そしてこの両者が区別されないものとして「生物発生の原則」（註4）をあげ、「一種の循環論法である」と断じている。大塚達朗（大塚1996）の心配—「文様帶系統論」は縄文土器の一系統性を証明する訳ではなく、堂々めぐりになるーは、山内清男が縄文土器研究の理論的な基盤を固めていた同時代（1930年代）に、生物学の分野ではすでに”概論”レベルであったとすべきだろうか。

向原東遺跡出土の表裏縄文をどのように理解するかを論じることを目的とした本稿の主旨からすれば些か論点を拡大しすぎたきらいがある。今後、多縄文系土器の変遷について比較形態学に基づく「循環論法」の適用範囲と限界について思慮しつつ分析を進めていくべきだと考えられる。

### 註

- (1)本文中に記したように本資料は正式報告前の未発表資料であり、資料の掲載をご許可いただいた城山町土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査団に感謝したい。
- (2)表裏縄文土器で木目状撚糸文の施文される資料は筆者の管見の限りでは類例を見出し得ない。この文様は「単軸絡状体 第1A類3」（山内1979）の、軸の中央に孔があり撚紐を通して一方を右、他方を左に巻いた原体を回転したものにあたる。後述するが表裏縄文ではないが鋸歯状に撚糸側面圧痕を施す

例（水久保、宮林）があり、これらとの関連が考えられる。

- (3) 押圧、回転縄文をもつ草創期の土器を多縄文系と呼ぶが、林謙作は押圧縄文を前期多縄文土器とし表裏縄文土器、撚糸文土器を後期多縄文土器とする（林1993）。山形真理子も井草式を多縄文に含めている（山形1991）。筆者は多縄文系と撚糸文土器の系統が判然としない現状においては山形の提起にもかかわらず、井草式を多縄文に含めることには躊躇せざるをえない。
- (4) 「生物発生原則」と型式論の理論的な前提についての関係を（山田1994等）で論じた。参照願いたい。

### 引用・参考文献

- 赤星直忠・岡本勇・村越潔 1958 「横須賀市平根山遺跡」『横須賀市立博物館研究報告（人文科学）』第2号
- 網谷克彦 1979 『鳥浜貝塚』
- 漆原 稔・渋谷昌彦 1986 『仲道A遺跡』
- 大塚達朗 1996 「土器－山内型式論の再検討より－」『考古学雑誌』第82巻第2号
- 丘 英通 1931 「生物学概論」『岩波講座 生物学 I 通論』
- 栗原文蔵・小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』第47巻第2号
- 小林達雄 1968 「室谷第一群土器に関する覚書」『歴史教育』第16巻第4号
- 小林達雄・安岡路洋 1979 「縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相－埼玉県大里郡岡部町水久保遺跡－」『埼玉県史研究』第4号
- 小林義典 1992 『蔵屋敷遺跡発掘調査報告書』
- 埼玉考古学会 1986 『埼玉考古学会30周年記念 シンポジウム資料』
- 埼玉考古学会 1988 「シンポジウム「縄文草創期－爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題－」」『埼玉考古』第24号
- 酒井幸則 1988 「増野川子石遺跡」『長野県史 考古資料編』全一巻（二）
- 渋谷昌彦 1988 「仲道A遺跡草創期土器の編年学的研究－小瀬が沢洞窟、室谷洞窟出土土器との比較を中心として－」『考古学叢考』下巻
- 鈴木道之助 1976 「雨古瀬遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV』
- 芹沢長介・吉田格・岡田淳子・金子浩昌 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」『石器時代』第8号
- 土肥 孝 1982 「近畿地方」『縄文土器大成1 早・前期』
- 土肥 孝 1986 「神奈川県大和市上草柳第3地点東遺跡出土の土器－関東地方「井草式」以前の土器様相－」『大和市史研究』第12号
- 戸田哲也 1988 「表裏縄文土器論」『大和のあけぼのII』
- 戸田哲也 1994 「表裏縄文土器研究の現状と課題」『縄文時代5』
- 友野良一 1988 「向山遺跡」『長野県史 考古資料編』全一巻（二）
- 中島 宏 1991 「表裏縄文土器群の研究」『埼玉考古学論集 設立10周年記念論文集』
- 中村喜代重 1984 『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告II』
- 中村孝三郎 1964 『室谷洞窟』
- 西村寿晃 1982 「柄原岩陰遺跡」『長野県史 考古資料編』全一巻（二）
- 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会 1967 『日本の洞穴遺跡』
- 萩谷千明 2000 『第30回利根川流域の縄文草創期』
- 塙 静夫 1976 「大谷寺洞穴遺跡」『栃木県史』資料編・考古1

- 巾 隆之 1998 「石畳岩陰遺跡」『群馬県史』資料編 1
- 原 信之 1967 『鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告書』
- 林 謙作 1993 「縄文土器の範囲」『日本考古学協会 1993年度新潟大会 シンポジウム1 環日本海における土器出現期の様相』
- 広瀬昭弘 1981 「北信濃小佐原遺跡の表裏縄文土器について」『信濃』第33巻第4号
- 宮井栄一 1985 『大林I・II 宮林 下南原』
- 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」『研究紀要』第5号
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 「井草式土器及び周辺の土器群について II—井草式土器の成立を中心として—」『縄文時代』第6号
- 持田春吉 1986 『上作延南原遺跡発掘調査報告書』
- 山形真理子 1991 「多縄紋土器編年に関する一考察」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第10号（下）
- 山田仁和 1994 「山内の夢もしくは種の考古学」『唐沢考古』13
- 山田仁和 2001 「山内清男の方法と「周圈論」—「サケ・マス論」の再検討を通じて—」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
- 山内清男 1969 「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号
- 山内清男 1971 「序文」『高畠町史 別巻 考古資料編』
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』